

福田善之戯曲集

焼跡の女俠

焼跡の女俠

山田善之戲曲集

角川書店

やけあと　じよきよう
焼跡の女侠



昭和49年 8 月30日　初版発行

著　者　ふくだ　よしゆき
福田善之

発行者　角川源義

発行所　株式会社　かどかわしよてん
角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3　郵便番号　102
電話（東京）（265）7111〈大代表〉　振替東京　195208

新興印刷・宮田製本

©Printed in Japan

0093-876004-0946(0)

福田善之戯曲集——目次

変化紙人形——私の思い出、一幕——

三

因果噺 一寸法師

五

焼跡の女俠

一〇

後記

二六

装帧 朝倉 撰

米谷誠一

〈写真構成〉米谷誠一

変化紙人形^{へんげかみにんぎょう}

——私の思い出、一幕——

私も、西洋のお伽噺^{とがはなし}を芝居にしてみよう、と思いました。

私は子守唄がわりに西洋のお伽噺をきかされて育つたものではありません。

そういうものからかなり縁遠い環境にいましたから。

しかし、私は誰かのために仕事をするのが好きです。私は芝居が好きですし、その誰かも芝居が好きだとなると、私はその人のために芝居を書くということになります。

その人は病身でした。学校へもあまり行かず、寝たきりの暮しがつづいていました。その人は、西洋のお伽噺が好きだったから、私も、たいがいの人が子供時代に読んでいたような物語を、いまごろはじめて読むことになりました。

その人の好きなお伽噺は、しょっちゅう変わります。が、ちょうどこのころはピーター・パンの話が気に入っていました。ですからこの小さなお芝居も、ピーターが主役です。もちろんその人は、もう、ピーターのことは忘れてしまっているのですが。

登場人物は、女と男（実は海賊フック）、それから女がもう一人。さらに、芝居の進行をたすけてくれる何人かが必要ですが、さしあたり、これだけでじゅうぶんでしよう。

ふとんがしいてあって、女が臥^{ふし}っています。

何尺か高い舞台の上の情景だと、できれば思わないでいただきたいのです。同じ平面の、手をのばせば届くすぐそこに、自然にふとんがあるのだと思ってください。この芝居が終るまで、それは同じと

ころにあります。

1

べつの女が登場します。彼女を「妹」とよぶことにしますが、それほどたしかな根拠があつてのことではありません。

妹 今日も学校は休むことにします。私は学校へ行きたくないから、虫下しをのみ、気持が悪くなっ

たふりをして、姉に、

「お姉ちゃん、放送劇をしてよ」

姉は嬉しそうな顔をします。姉は病氣のために学校へ行けません。

姉は、画用紙に仲よくなりたいとおもう人に似た顔をかいて切りぬぎます。彼女があこがれていたすてきな上級生の名前がチヨというので、人形あそびに「チヨちゃんごっこ」と名づけています。

チヨちゃんは三人姉妹でした。今道チヨ、チエ、タエ。姉は、チヨちゃんたちと話をしたこともありません。

寝ていた「女」が半身を起こして、ボール箱から紙人形たちを出し、チャブ台の上に並べます。しあわせそうです。

やはり画用紙でつくった人形たちの衣服を、つぎつぎと脱がせると、まっしろな人形の裸があらわれます。

「女」はたんねんに点検して、首や手のもげかかっている人形には、紙を小さく切つてうら打ちをします。

しかし、彼女の態度は、きわめて公平を欠いています。気に入っている人形と、そうでないのとの間には、明確な差別を設けています。彼女は、前には気に入っていたのかもしれないけれど、いまは好みにあわなくなったらしい人形の一人を、ごく粗末にあつかいます。

女 (突然) チョちゃんは死んだの。

妹 好きだったのに。だから、首がもげそうになったのに。

女 お葬式はあした。

妹 ちょうだい、私に。

女 (じろりと見て、チョちゃんをお茶の罐に入れ、新しい紙人形の一つを妹に渡す) あんたの家の子になさい。

妹 あたらしい子ね。(狂喜して) 髪が横わけだわ! 何て名前つけるの、おねえちゃん。

女 (関心がない) いいようにしたら。

妹 (思い切って) 高杉けいこちゃんにします。

女 へんな名前。

妹 (客に) 私は、十人くらいの人形に、自分がしゃべらせてもいいことになっています。(姉に) やさしい子よ。

女 意地悪よ、きつと。

妹 (客に) でも役がつきさえすればいい、と、私はおもいます。老け役でも「その他の^{ほか}みなさん」でも。

女 きょうは「かみさまのおはなしごっこ」をします。

妹 姉は、鏡をもつてくるように私に命じます。鏡をたたみの上におくと、天井がうつります。する

と、そこが高天たかまが原です。だから、どの部屋にも、高天が原はあります。姉は、鏡をみつめています。すると、私はおそろしくなります。早く、姉の口からことばが出ないと、さけび出してしまふような気がします。姉の眼から、黄色いまだらの蛇がはい出してくるから、私は、なぎ倒されてしまいます。姉は、オトタチバナヒメや、羽衣の天女やらの話をしているのに。なまぐさい風が、窓を鳴らしていて、

女 なにがみえる？（鏡のなかのこと）はやく！

妹 鶴。白い鶴。

女 （さげすんで）雲が焦げ茶なのに、合わないわ。（やさしくなって）でも、いい。首に赤いリボンを結んであげよう。それから？

妹 風が、窓を鳴らしています。——足。

女 あし？

妹 （しまったと思うが、居直って）大きな、毛むくじやらのね。きっと、スサノオノミコトが——

女 馬鹿ね。あたしは、こまかいとこまでキチンと理窟にあっていないと、いやなの。どうして毛むくじやらの足の人に、おかあさんがあるの？ おかあさんに会いたくて、涙をこぼしたりするの？

馬鹿ね。

妹 まちがってたわ。

女 まちがってたら、なおせばいいのよ。配役がきまつたわ、発表します。

妹 私は、胸がつぶれそうになって、発表を待ちます。

女 逆巻く波が打ちよせる暗い崖にひとりたたずみ、なき妻をおもうイザナギノミコトは、ご存じ朝岡みどり！

妹 (うけ入れて) みどちゃんはしっかりしてるものね。(客に) みどちゃんは、姉の好きな少女小説の主人公です。

女 いまは夜見の国で遠い夫をおもつて、お琴をかき鳴らしているイザナミ姫ノミコトは、マーガレット会の新人二葉洋子。

妹 (がっかりして) 拔擢ね。

女 二葉ちゃんは情ぶかいから、悲劇には向いてるわ。そのほかマーガレット会のみなさんです。

妹 (大決意で) スサノオノミコトは、高杉けいこちゃんがいいわ。

女 スサノオノミコトは、今日は出ません。

妹 でも、

女 ね、かみさまが話しかけると、花や露草がうたうでしょ。高杉けいこちゃんはその歌をうたう役、川田孝子に似てるから。イザナミ姫は琴をひきます。ポロロン、ポロロン。伴奏は東京放送カンゲン楽団。(うたう)

黄色い蝶々がとんできた あね あね いいことなのよ

妹 あじさいの花がうたいます いいわ いいわ だまされてあげるわ 昇っておいで 縄梯子
女 音痴ねえ。

妹 あ、だれかのぞいてる。

二人は、いそいで紙人形をかくします。
一瞬の暗転——としてもかまいません。

2

のぞいていたのは、大きな白い紙人形です。

〈女〉が、それにむかつて声をあげます。

女 あ、おにいちゃん。

風があれば、それはひらひらしています。
また一瞬の暗転がいるかもしれません。

3

それは、パジャマを着た男の人に変っています。小ぶりの男です。いい忘れましたが、〈女〉は三十分くらいです。〈妹〉は二十代のなかば。そして〈男〉は三十七、八に見えますが、もちろん、すべてこれを見かけの上のことです。

〈男〉が登場すると〈妹〉は眼を伏せます。

男 いれてくれよ。

女 おにいちゃん、また会社休んだ、だめねえ。

男 行つて来たよ、もう夜中だもの。
女 嘘。

男 無事に復讐をとげた巖窟王は、どうなったんだっけ。また海賊になつて、海へのり出すんだらう、果てしない荒海へ。右舷三八〇度、面舵、ようそろ！

女 あはは。

男 なぜ、男の人形はいないのかね。ぜんぶ女が、

女 いるわよ、千葉正明クン。和歌山の郵便局の子。

男 好きだったのか。

女 知つてただけ。

男 ふん。

〈妹〉は、顔をそむけています。そつと、自分のうけもちの人形たちを、とりわけています。〈男〉は〈女〉の人形たちをもてあそびます。と、唐突に暗くなる。そしてたとえば猫の声、さけび声。が、一声だけで、すぐにあかるくなる。

4

〈男〉が四つんばいになつて、その上に〈女〉がこしかけています。
〈妹〉のすがたはない。

男

（背の上のへ女）にうれしか。うれしいだろう、お父つつあんに会えて、お父つつあんといっしよ。……あれは、ひどいバラックだったな。そこへ十何世帯もぎっしり雑居だ。超満員の海岸の海の家、ちがうところは煤と匂い、ひでエ寒さだった。お前は、パンのかけらかじってる子供に、手エ差し出した。紅葉のような。ちょうだい。いや、たべたい、といったのか？ 汚れた顔の子供がこわった。お前はひどく腹がへっていたのに。……その日、お父つつあんたち、鉄砲をくばってもらった。だけど、何故だか、お父つつあんだけにや、鉄砲が渡らねエ。しかし、その鉄砲、ぶすつとしか音がしねエ。配りに来た仲間が、齒アむきだして笑いやがった。……そのあくる日だ。お父つつあん、こんなにしてお前を背にのせて、出かけた。旅立ちだ。お前にとっちゃ、夢のような仕合せだったことが、お父つつあんにやわかった。突然、事態がわかった。おれたちは死に行くんだ。お父つつあんとお前。……そーいや、ちよつとはなれたところに、人が二、三人、寒さに着ぶくれておれたちを見送っていた。ありや、親戚か？ 家族か？ お前は泣いた。声あげて泣いた。お前を生んだおっかさんの泣き声に似ていた。いや、お前はしあわせそうで、泣き声はおれのだった。おれが泣いてたんだ。

女
パパ。

男
（うたう）パパは……どんなに……お前を愛しているか……

女
どうして、ぼくを捨てた？

男
パパはア……どんなにィ……

女
大事なことをするために、捨てたんだろ。だから、ぼく、死ぬんだろ。大事なことで、何だ？

——ぼくだね。

男 (うなずく) お前だ。

一瞬の暗転。

5

つぎにあかるくなると、〈男〉はおなじく四つんばいで、その上には大きな紙人形。

男 そのとおりだ、お前だ。目的のためにおれアお前をすてた、その目的は、お前だ。パパはア、どんなにイ……(間) くたびれちまったよ。もう息が切れて、体が鉛みたいに重いんだが、おれたちの旅立ちなんだ、ともかく。さア、陽気に行こうぜ、兄弟。

一瞬の暗転。

女 (不安にかられて叫ぶ) パパ！ パパ！

6

こんどは、ゆつくりとあかるくなります。

もとの場面。ふとんの上の〈女〉と、〈男〉が戯れるようにしながら話しています。〈妹〉もいます。

男 彼らは、モンテ・クリスト島にはもう帰れやしない。だって、あまり多勢の人間が、モンテ・ク

リスト島のありかを知っちゃったんだからな。きっと、娘のムコが裏切ったんだ。へへ。

妹 彼は、姉にとり入っています。彼があたしたちを愛しているのは、ほんとうかもしれないのですけれど、でも、私はごめんです。私は、かけ出して行きたくなります。でも、叫ぶと、きっとへんな声になるだろう、と思います。人形が、なまぐさくなるのに、と、私は心配です。風が止んでしまいました。

男 ダンテスはおじいさんになったんだよ。でも、化けるのがうまいんだ。ただ、化けるのがうまいだけさ。

妹 姉は、卑しい笑いをうかべています。

女 巖窟王はもう終わったのよ、三銃士も。

また急に暗くなる——じき弱い光が入ります。音楽があるかもしれない。

7

真ん中に椅子があります。

こんどは、〈女〉のしいていたふとも、ほんやり見えたままで、〈妹〉もいます。この一齣は、薄あかりのままで演じられます。

男 ぼくはあなたを覚えていないけど、長い間のお馴染みですね、たしかに。(不用意なことをいうまいと気を引きしめる。間)でも、何年たったでしょう。(急にいら立つ)何年たったんです！ 刑事さん。